【 保育 ２ 】触れる、抱っこをする

★【職員を守る、園を守る 1：男性職員を守るために】も参照

（においに気づき、穏やかな声、笑顔 (※) で呼びかける）「〇〇さん」
（〇〇さんがこちらを見る）
「うんちした？ ちょっと見せてね」（※※）

子どもに触れる時は、まず穏やかに声をかけて、顔を見る

急にオムツを引っ張ってのぞきこむ、あるいは、オムツに限らず、何も言わず、目も合わせずに後ろや横から子どもの体に触れる、体をつかむなどは、子どもを驚かせ、恐怖を感じさせます（おとなでも怖い）。「０歳はわからないから大丈夫」？　では、何歳何か月なら「わかる」から、保育者はしないのでしょう？

もちろん、命にかかわるできごとの瞬間、子どもを守るために体をつかむ、大きな声を出す等は例外です（すぐ穏やかな声に戻り、説明してあげてください）。

※ からかいを含んだ笑い、言い方、動作は、常に禁忌。排泄の場合、「くっさ〜い (笑)」「うんち、またぁ？」等。
※※ そっと見ましょう。ガバっと引っ張らないで。

（〇〇さんが少ししょんぼりした様子でいるのに気づき、穏やかに、でも真面目な表情で呼びかける）
「〇〇さん、どうしたの？」（柔らかいまなざしで待つ）
「……」（下を向いて、保育者の手にふれる）
「〇〇さん、私の手、ぎゅってしたい？」（待つ）
「うん。ぎゅっ、する」（保育者の顔を見て、手にふれてから、自分でハグをしてくる）

スキンシップは、子どもが自分から「したい」と表明できるように

スキンシップは大事ですが、子どもが皆、いつでも、誰からでも触れられたいわけではありません。

子ども自身が「今、どうしたいか」「この人とは何をしたくないか」を考えられるよう、おとながかかわることは、自分の体や感情を大切にする第一歩です。

ハグはもちろん、ハイ・ファイブ（ハイタッチ）、手をつなぐなども同じです。「〇〇しよう」「先生に〇〇して」ではなく、「〇〇したい？」と、動作と言葉で尋ねましょう。

０歳でも、抱っこより「自分で動く！」が好きな子どもはいます。抱っこされたくない時もあります。何歳児であれ、不快やいらだちに見える行動をしていたら、すぐ抱き寄せるのではなく、「どうしたの？」と言葉と表情で穏やかに呼びかけ、手を差し出すなどして、「いつでもおいで」というシグナルを出しましょう。それだけで安心することもあり（下の「コ・レギュレーション」の一種）、必要なら子どもは自分で来ます。

感情を制御する練習は、おとなと一緒に

子どもが自分の感情を理解し、コントロールする方法を身につけていくためには、おとなのモデルが不可欠です。これは、感情の co-regulation（コ・レギュレーション、一緒に制御する）と呼ばれます。

その子にはまだわからず、扱いきれないストレスを表現していたら、おとな自身が落ち着いてから、抱っこする、座って手をつなぐなどして、穏やかに話しかけます。おとなの穏やかな心拍、呼吸、言葉がモデルになって子どもも次第に落ち着きます。「痛かったね」「おもちゃをとられて、〇〇さんはビックリしたね」といった言葉も少しずつ脳に入り、自分が感じたストレスを（言葉として）理解し、

保育士がかかわりもせず、漫然と子どもを抱っこし続けることは、育ちを促す仕事になりません。

徐々に自分で扱うことができるようになっていきます。

子どもが落ち着いたら、抱っこし続ける必要はありません。視線を一緒に外へ向け、子どもが自分で世界にかかわっていけるよう、そっと促しましょう。

幼児になっても、甘えて「抱っこ」と言う時はあります。そんな時は抱っこして、穏やかに、数分であっても話をしてあげてください。おとなでも、言葉にならない不安やつらさを感じることはあるのですから、子どもは当たり前です。

製作：掛札逸美、青柳淳子、小倉北ふれあい保育所。写真の著作権は小倉北ふれあい保育所。イラストはGeminiによる。未就学児施設の職員が保育に用いる以外の利用は一切お断りします。このシートをコピーする時は、必ずこの文言もコピーしてください。